

橋木俊詔・浦川邦夫『日本の貧困研究』（東大出版会）でわかったこと

- (1) 日本で貧困が深刻なのは誰か
高齢単身者、母子世帯、若者
- (2) 貧困の捕捉率が異様に低い（15～20％）理由
 - ① かなり厳しいミーンズ・テスト
 - ② 家族・親族の扶養義務の存在
 - ③ 受給資格などの情報が低所得者に伝わっていない
 - ④ 恥の文化
- (3) 生活保護制度はどれだけ機能しているか
 - ① 水平的効率性：13～19％ → 貧困削減に寄与していない
 - ② 貧困削減策の効率性（貧困層への過剰受給、非貧困層への無駄な受給）はうまくいっている。80％を超えている。すなわち、カッコ内の現象はさほど発生していない
 - ③ 公的年金制度の存在は、水平的効率性を85％（高齢者）に高めている → 公的年金制度の重要性を示唆
- (4) 最低賃金制度の効果
 - ① 最低賃金のアップは限定的ではあるが、勤労者世帯の貧困者数を削減する
 - ② 賃金分布を平等化する効果もある
 - ③ 最賃は雇用削減効果があるとされるが、その効果はほとんどない。日本の労働市場は monopsony (需要独占型)かもしれない
- (5) 日本人は貧困ないし分配をどう倫理的にとらえているか
 - ① ロールズ型の倫理基準への支持が高い
 - ② 相対的貧困回避型を支持するか、絶対的貧困回避型を支持するかを問えば、他人との比較を前提にする相対型への支持の方が高い。あるいは絶対型貧困への対処だけでは困る、という解釈が可能